

特集 彦根辻番所の会 第1回辻番所サロン「芹橋生活」開催

2008年12月21日(日)、第1回辻番所サロン「芹橋生活」が、彦根市芹橋二丁目の辻番所・足軽屋敷で開かれ、芹橋の住民など約50人が参加されました。主催は、辻番所の活用をめざす「彦根辻番所の会」と彦根景観フォーラムです。概要をお知らせします。

第1回 江戸時代の足軽

母利 美和 京都女子大学教授
彦根景観フォーラム副理事長



芹橋の住人であった足軽とはどんな人たちだったのか。江戸時代の一般的な足軽の姿を紹介し、彦根藩の場合と比較して特徴を明らかにしたい。

■ 江戸時代の足軽の一般的な姿

江戸時代になると戦乱の終息により臨時雇いの足軽は大半が召し放たれ武家奉公人や浪人となり、残った足軽は武家社会の末端を担うこととなった。

諸藩では、大名直属の足軽は足軽組に編入され、平時は各所の番人や各種の雑用、「物書き足軽」と呼ばれる下級事務員に用いられた。このほかに、大身の武士(彦根藩なら木俣家など)の家来(陪臣)にも足軽がいた。

● 一代限りの身分

足軽は、一代限りの身分。実際には、引退に際して子弟や縁者を後継者とすることで世襲は可能であった。また、薄給ながら生活を維持できるため、後にその権利が「株」として売買され、裕福な農民、商人の二・三男の就職口ともなった。

さらに、有能な人材を民間から登用する際に足軽として在籍させ、その後昇進させる等のステップとしての一面もあった。足軽を帰農させ軽格の「郷土」として苗字帯刀を許し、藩境・周辺警備などに当たさせた事例もある。(熊本藩、仙台藩)

● 武家奉公人と同列の扱い

江戸時代の足軽は、鉄砲隊とは名ばかりで、武家奉公人として中間・小者と同列と見られる例も多く、諸藩の分限帳には、足軽や中間の人名や禄高の記入がなく、ただ人数が記入されているものが多い。また、百姓や町人と同じ扱いをされた藩もあった。

■ 彦根藩の足軽の特徴

彦根藩の足軽は弓組20人が6組、鉄砲組30人が25組、40人が5組、50人が1組、合計1,120人の編成であった。

● 苗字帯刀を許された身分

彦根藩の足軽は、苗字帯刀を許されていた。苗字を持たない中間・小者とは一線を画する身分として扱われ、慶長期の分限帳では、個々の人名までは把握できないが大坂両陣に出陣した足軽はすでに苗字をもっていた。

● 一戸建・門構えのある足軽組屋敷を形成

城下の「外ヶ輪」(外堀より外の第4郭)の居住区にそれぞれ50坪程度の屋敷地を与えられて一戸建ちの門構えのある屋敷を構え、組ごとに組屋敷を形成した。他藩では長屋住まいが普通である。扶持高は、慶長7年(1602年)では、一人につき17石とされ、幕末期では20俵2人扶持とされた。

● 「役儀」を勤める足軽

武役では、日常から武芸稽古が求められ、稽古銀が支給された。また、井伊直孝の時代に武役の他に城中番を「役儀」として勤めるようになった。元禄8年(1695年)には、「御城内番」や城下11口に設けられた「御門番」を勤めていた。

このほかに、江戸詰、普請方への「出人」、大津廻米舟への「上乘御用」、領内の「米見」、近国・遠国への使者派遣などを順番割当てで勤めた。また、作事方・材木奉行・町奉行から引き抜かれ役儀を勤める「引け人」もあった。

これらを含め、彦根藩では武士の80%が役儀を勤め、他藩に比べて非常に多い。彦根藩の足軽は他藩にくらべ優遇されているが、役儀が割当てられ藩政機構に位置づけられたことと関連が深い。

■ 町人との関係解明が今後の焦点

今後の研究の焦点は、町人との関係である。足軽屋敷地は、本町、河原町などの商業地と接しており、日常生活でも町人との関係が強かったと見られる。新史料が見つければ、足軽の暮らしを解明することも期待できる。



ひこね街の駅「寺子屋力石」耐震改修レポート(最終回)

■耐震改修の実際

前回は、寺子屋力石で実際に行った施工事例から、**1. 柱の根継ぎと新しい柱の追加、2. 足固め、3. 部屋の四隅を固める**を紹介しました。ひきつづき、木造伝統構法のねばり強い耐震力を回復し強化する改修方法を見ていきましょう。

4. 荒壁パネルと木格子

重要な柱の横に壁を入れるのですが、伝統的な土壁は多くの手間と時間がかかります。そこで、土壁とほぼ同じ機能をもつ荒壁パネルを木枠にビス止めしました。

土壁は、地震の揺れに対して当初は抵抗しますが、ゆれが大きくなると自ら壊れてエネルギーを吸収し、軸組みに伝わるゆれを軽減する優れた機能を持っています。



荒壁パネルは、格子に組んだ杉材に壁をぬってパネル化しており、ゆれに対しては、まずビスが抜ける、パネルが少しずつ壊れることでエネルギーを吸収し、柱や梁などの軸組みへの負担をへらすことができます。

簡単に取り付けられ交換も容易な荒壁パネルですが、土壁と同じく光や風をさえぎってしまうので、暗くなったり風通しが悪くなります。

そこで、比較的太い木で格子を組んだものを壁のかわりに重要な柱の横に設置しました。

木の格子は、当初はゆれに抵抗しますが、揺れが大きくなると組まれた木材がひずんでめり込み壊れ始めます。これにより土壁と同じく、ゆれのエネルギーを吸収します。



外観もおしゃれです。現在、寺子屋力石では、南国カフェ「ルアム」が営業しています。木の格子が美しくインテリアとして取り入れられていますので、ぜひ、訪れてみてください。

5. リフォームと耐震改修を重ねる

こうして2007年10月31日に、力石の耐震工事は完成しました。

この耐震改修はデザイン的にも配慮されており、大変美しい空間ができあがりました。

いつくるかわからない地震に対する耐震補強は容易に進みませんが、明日からの暮らしを利便にし、美しい空間をつくるリフォームと耐震改修が重なっていれば、誰もが大きなメリットを感じます。

今回の改修は、こうした点を配慮して取り組みやすい改修の実例を提供することができました。(終)



完成披露の様子

日本耐震グランプリ 内閣総理大臣賞を受賞

平成20年11月4日、寺子屋力石の木造伝統構法による耐震改修事例とその普及戦略耐が、第2回日本耐震グランプリ内閣総理大臣賞を受賞しました。

